

寛政年間の谷文晁

磯崎康彦

一、『集古十種』への始動

天明八年（一七八八）正月、京都は未曾有の大火となった。多くの寺社や公家宅が灰燼に帰したばかりか、御所も焼失してしまった。そのため光格天皇は、聖護院に居を転じた。老中主座の松平定信は、仮御所造営や災害にあった窮民援助のため、勘定奉行根岸鎮衛を京都に向かわせたのである。

定信自身も、次いで上京した。天明八年五月九日に江戸をたち、中仙道を経由して二十二日京都に着いた。人足も少なく、きわめて質素な一行であったとされる。定信は、聖護院に参上し、かつ火災にあった二条城や御所の焼失跡を巡察した。同月二十九日に大坂に行き、大坂より奈良、駿府を経、江戸に六月二十七日戻ったから一か月半あまりの旅であった。

さて、御所の再建修復は、幕府側の仕事であったため、幕府側から林大学頭、柴野栗山らが、朝廷側から庶務の裏松左大弁光世、高辻右大弁らが出席し、協議の結果、古制に基づく造営と決定した。朝廷側の故実家裏松固禪（光世）著『大内裏図考証』に従い、平安時代の建築様式を基本的な範としたのである。定信は、『宇下人言』で、「所司代行むかひて此ころ紫清（紫宸殿と清涼殿）両殿御復古之義被仰出たりとて画図なども見」たという。いずれにしても、「御費用など夥しき事と察し奉りぬ」とのことであった。

寛政の改革をおこない財政緊縮をすすめる定信にとって、造設費用

を節約したいことはいままでもなからう。そこで壮大な新造営を望む朝廷側に規模の縮小を求めた。この方針は、造営内の絵画の出費についても貫かれた。幕府の絵師を江戸より京都に送りこめば、画料、旅費、生活費などが高騰する。かわって京都の絵師を採用すれば、いくらでも安くすむ。そこで京都を中心に活躍した絵師岸駒・岸岱・円山応挙・円山応瑞・土佐光清・土佐光文・土佐光武・狩野永岳・原在照・勝山琢眼・塩川文麟らが用いられた。

御所には紫宸殿・清涼殿・諸大夫間・小御所・学問所・御常御殿・御三間・迎春・聴雪・御花御殿・皇后御常御殿・若宮御殿などかなりの殿舎があり、多数の襖絵や杉戸絵で満さねばならなかった。選択された主題は、中国の賢聖肖像・列女伝・岳陽楼・赤壁・蘭亭曲水・商山四皓など、植物は竹・菊・梅・芦・芭蕉・栗・桃・朝顔など、動物は鶉・虎・鶴・おうむ・鷹・雀・鶏・リス・猿など、風景風俗は近江八景・耕作図・賀茂祭・富士などであった。公的な間には、中国の勸戒主義的な題材が選択され、狩野派の絵師によって制作された。帝鑑図である。私的な間には、比較的身近な風景・植物・祭などが選ばれ土佐派の絵師により描かれた。加えて新興の円山四条派の絵師も参入したのである。

しかし襖絵でも、内裏正殿の紫宸殿を飾る賢聖障子図は、伝統的に幕府の奥絵師が担当した。もともと格の高い仕事であったからである。賢聖障子は、紫宸殿玉座背後の九間にはめ込む九枚の障子であった。中央一枚は、向かいあう獅子・狛犬・その上に文書を負う亀——負

文亀——の図柄である。残り八枚は、一枚につき四名ずつ、合計三三名の中国三代から漢、唐の聖人賢人の肖像画であった。各肖像上方には、色紙にその人物の名前と徳行業績が賛文として記された。

賢聖障子の制作にあたったのは、狩野栄川（典信）であった。栄川は、名は典信、白玉斎とも号し、木挽町狩野の絵師である。安永九年（一七八〇）法印に叙せられ栄川院と称した。栄川は、平安時代以来踏襲されてきた賢聖障子図にとりくみ、寛政二年（一七九〇）に下絵を描きあげた。

賢聖障子の賛文は、柴野栗山が考証し、賀茂保孝が書にあたった。しかし寛政二年二月末、以前の賛文がかんばしくないため書き改められた。とはいえ江戸の儒者は、たとえ良文であっても、京都の公家衆が鶴の目鷹の目で文章を検証し、ないがしろにすることを心配していたのである。

考証役の栗山は、同年七月に、栄川下絵の賢聖像の衣服に問題があると気づいた。栄川は栗山としばしば出会っていたが、同年八月病により急死してしまつた。そこで賢聖障子図は、洞春美信と住吉広行の二人にひき継がれた。水野為長の『よしの冊子』に次のようにある。

賢聖御障子画、洞春住吉へ被仰付候由。極彩色ニ懸り候てハ十分住吉よろしかるべき由。

「洞春」は洞春美信、狩野洞春である。洞春は元仙方信の子で、父の門人石里洞秀から贅沢を禁じられ、厳格な教えをうけたという。洞春は探幽の古法を守り、雪舟の筆意を踏襲し、式部卿法眼に叙せられた駿河台狩野の絵師であった。

一方、「住吉」は、江戸に移った土佐派の分派住吉派の絵師住吉広行である。『扶桑画人伝』や『墓所集覽』によると、通称内記、景金園と号し、板谷（慶舟）広当の子で、住吉広守の門人である。しかし広守に子がおらず、師家を嗣ぎ、和画の鑑定を能くし、幕府絵所住吉家の当主となった。文化八年（一八一二）八月、五七歳にて没している。

さて、急死した狩野栄川には息子がおり、狩野惟信（養川院惟信）といつた。天明元年（一七八二）に父と同様に西丸奥御用に任せられ、同年法眼に叙せられた。三八歳のとき、父急死のため、木挽町狩野の当主を嗣いだ。惟信の絵画は、

由 養川（惟信）名人ニ候へ共、只利口の絵にて中々父にハ及申間敷

といわれた。「利口の絵」とは、賢く要領のいい絵という批判的な意味であろう。惟信は、父栄川に及ばぬ画家として低くみられていたのである。

惟信は、父の手がけた賢聖障子画の仕事を継ぐことができず立腹したのである。木挽町狩野の惟信にとって、賢聖画の仕事が、仲の悪い駿河台狩野に奪いとられたと思つたにちがいない。そこで惟信は、狩野洞春に嫉妬し隘口をたたいた。

此度右之絵（賢聖障子画）被仰付候当日、わざ／＼養川（惟信）奥より出候て住吉ニ逢、何卒貴様ニ被仰付様にした。洞春ハ一体賢聖の旨ニ合ぬ男也と申候由。さすれば少々姦物にも可有之哉、とさた仕候由

狩野洞春は、心のよこしまな人物であるから、知徳のすぐれた聖人を描くのに相応しくないという。

一方、洞春とともに賢聖画の任を託された住吉広行は喜んだ。前記の引用文に続いて『よしの冊子』に次のようにある。

賢聖の間の御絵、先年ハ土佐家ニて相認候処、探幽、養朴（常信）など名画出候、二百四五十年も土佐家相ヤミ、狩野家の物ニ相成居候所、此度被仰付候ハ、誠ニ難有何共恐入、たとへ此上不被仰付候共、御撰ニ相成候が難有事と申居候由のさた。

内裏は焼失のたびに再建されてきたが、宮廷絵所預の土佐派が、大和絵の伝統を踏まえて画事の任にあつた。しかし、一七世紀に狩野探幽や「養朴」こと狩野常信らのすぐれた絵師が輩出すると、内裏

障壁画は「狩野家の物二」なってしまった。しかし今回、土佐派の任に戻ったことを喜んだのである。

さて狩野惟信は、父栄川の描いた賢聖画の下絵を「一鉢中仲あしく」ある駿河台狩野の洞春でなく、住吉広行に送った。『よしの冊子』に、

住吉方へ栄川院の下絵も下り、且又先年御絵形も相下り候由。住吉先年の御絵形此度栄川院の下絵を致拜見、中々此位の御下絵二ハ負ハすまいと申居候よし。

とある。栄川の下絵のまえに、すでに「御絵形」も送られていたとわかる。下絵の送付は、寛政二年（一七九〇）一月であった。結局、『よしの冊子』に「住吉内記（広行）御絵御用被仰付候」とあるように、広行が賢聖障子を仕上げることとなったのである。

住吉広行は、賢聖画に関する家伝の古画を借りうけて悦び、寛政三年はじめに第二本ともいふべき下絵にとりかかった。第二本の下絵も、柴野栗山や文章博士の論議考証によって問題視され、寛政四年の第三本の下絵に発展したようである。その間、賢聖障子中央の絵画《獅子・狛犬・負文亀》は、寛政三年（一七九二）五月末にできあがった。

住吉内記（広行）、獅子狛犬の画出来候由。栄川杯認候下絵と八殊の外違ひにて誠二宜き由。中々栄川院杯及候所二無之よしのさた。と『よしの冊子』にある。広行の《獅子・狛犬・負文亀》は、第一本下絵と異なりすばらしい出来栄えだった。その後、広行は江戸で賢聖障子画を完成させ、寛政四年九月、京都の内裏に送ったのである。ところで御所造営は、寛政元年二月に着工され、翌二年末にはほぼ完工した。完工にともない、光格天皇は、同二年十一月に聖護院から新御所に移った。各殿舎を飾る襖絵や杉戸絵も、造営と平行して進められていた、と思われる。

寛政四年（一七九二）十月、住吉広行、柴野栗山、屋代弘賢は定信の命をうけて京都へ向かった。弘賢は、和漢の学に通じた幕府の右筆である。一行の目的は、御所の賢聖障子視察であったことは言うまで

もない。しかし同時に、弘賢の紀行文『道のさち』に「都近きあたりに、ありとある古き筆の跡、うつしたてまつれ」とあり、京都・奈良の古社寺調査も託されていたとわかる。職種から広行が絵画を、弘賢が書を調査分担したのであろう。

近江国出身の詩僧海量法師は、御所での広行の様子を伝えた。旅を好み数々の歌を詠じた海量法師は、寛政四年（一七九二）西遊し、一〇月一五日京都に入った。同月二〇日の日記に次のようである。

二十日には、同じく上京してゐた荒木田久老を義兄と共に訪うた。その日また経亮と、下の御陵にゐて造営の成った御所の襖に花鳥を描いてゐた住吉内記（広行）を訪うて、その絵を見た。そして「大宮にのぼらぬ吾身大宮にまつるうつしゑけふみつるかも」と詠んだ。

文中の荒木田久老は、伊勢外宮の禰宜で国学者宇治五十木。経亮は有職故実にくわしく、和歌を能くした国学者橋本経亮である。海量法師と経亮は、広行が御所で描く花鳥襖絵を見た。おそらく公的な儀式の間でなく、私的な御座所の襖絵であったろう。ともあれ御所は再建されても、殿舎の装飾は、寛政四年末に至っても完成されていなかったとわかる。江戸より送った賢聖障子図は、厳正な考証学に基づいての仕上げられていたから、広行が御所で絵筆を加えたことはなかったと思われる。

さて、住吉広行、柴野栗山、屋代弘賢一行は、次いで京都・奈良の社寺調査に入った。『寺社宝物展覧目録』があり、一行の行動がわかる。これは、一月三日の東寺をかわきりに、二月五日の等持院、竜安寺までの調査記録である。

寛政四年一月三日、広行、栗山、弘賢は東寺の什物を調査し、以後京都で壬生寺・菅大臣社・空也堂・知恩院・下御霊社・東福寺・六条道場・四条道場・誓願寺・福正院・大雲院・壇王林寺・南禅寺・若

王寺・銀閣寺・平等院・橋寺・恵心院・興聖寺・通円茶屋を巡った。ただ一月四日の壬生寺・菅大臣社・空也堂、また一二日の壇王林寺調査には、「内記不参」とあり、広行は参加しなかった。また一月一八日の万福寺調査には、「彦助一人罷越」とあって、栗山一人が赴いた。

一月一九日、一行は奈良に向かい、二〇日より三日間、法隆寺の調査にあたった。以後信貴山孫子寺・竜田本宮・当麻寺・橋寺・岡寺・竜蓋寺・多武峰護国院・長谷寺・三輪神社・三輪平等院・大御輪寺・釜口長岳寺・普賢院・布留社・在原寺・竜象寺・東大寺・般若寺・興福寺・一乗院宮・薬師寺・唐招提寺・西大寺・秋篠寺・高林寺を巡った。二月四日の般若寺、同月五日の一乗院宮、同月六日の薬師寺、唐招提寺・西大寺、同月七日の秋篠寺の調査に広行は加わらなかった。「住吉社務津守家 十二月六日 内記一人罷越 撰津」とあるから、広行は大坂に出掛けていたのである。広行はこのとき、同じ住吉派の津守家を訪ね、後醍醐天皇から賜わったという六位車網代（網代車）を調査した。

二月八日、一行は京都に戻り、以後東寺・西本願寺・広隆寺・神護寺・梅尾高山寺・天竜寺・本能寺・等持院・竜安寺を巡った。二月一〇日の広隆寺は、広行一人で調査した。広行の最終調査は、二月一日の神護寺、梅尾高山寺であった。広行は、同月二日以降の栗山と弘賢の調査に加わらず、一足先に江戸に向かったのである。

栗山と弘賢は二月一五日、等持院・竜安寺を詣で京都を離れるが、江戸への帰路、同月一九日に尾張熱田宮、二四日に駿河清見寺に立ちよった。熱田宮に「夜内記不参」とある。わざわざ夜と明記しているから、帰路別行動をとった広行は、日中一時合流したのかもしれない。広行、栗山、弘賢は、ほぼ三か月の調査をおえ、二月末に江戸に戻った。翌月（寛政五年正月）、幕府は、賢聖障子の一件に対し褒美を与えた。『続徳川実紀』に次のようにある。

儒臣柴野彦助賢聖画像調たりしを褒せられ黄金二枚を賜ひ。同じ事により住吉内記慶舟銀五十枚を賜ふ。

柴野栗山や広行のみならず、慶舟（桂舟）こと、広行の父で土佐派の画家板谷広当も褒賞を賜った。すると広当は、息子広行の賢聖障子画制作に助言協力などをしていたのであろう。

広行らの諸社寺の什物調査は、現地のみならず江戸帰着後も続けられた。『寺社宝物展覧目録』の凡例に、

一、此度写取候分者、三角印付置候。但先達而御写有之候品も、格別見事二相見候物者、為御見合、猶又写取儀も有之候。

一、御取寄にも相成可申と奉存候品者、丸印付置申候。とある。現地で写しとった什宝は三角印をつけ、さらに江戸に取りよせるものには丸印をつけたのである。三角印が二三〇点、丸印が一六三点もあり、三角印丸印両方をつけたものは、比較的絵画作品が多い。現場で写しとったが、さらに時間をかけて江戸で正確に臨模検証したかったのである。

寛政四年の広行、栗山、弘賢の上京は、賢聖障子の検証と同時に、『集古十種』編纂のための旅行であったといえよう。

二、寛政六年の文晁

寛政六年春、谷文晁は感応寺で展示会を開いた。谷中の感応寺は、日蓮上人の開山による日蓮宗であったが、元禄年間に天台宗に改まり、幕末に天王寺と改名された。境内に花木が多く、看花の客で混雑し、そのため富興行で有名であった。文晁は、北山寒巖らとともに展示作品を縮写し、『書画甲観』として上梓した。巻頭序文の文晁の書画甲観縁起をみると、出版に至る経過がわかる。

寛政甲寅花朝後七日、晁于感応精舎、広請名家之秘藏、旁徵友朋之筐、法書名画、銘心絶品、駢集展攤從観評賞、維適季春之月、

天明気和、賞心楽事、遠慕蘭亭之勝会、清晨美景、同心蓋簪聊、擬西園之雅集於是、乞名流高手、映臨擲影、克肖逼真、縮成副本、又雜拙作併附九鶴、生録版成、贈四方之同好、更求遺逸、以謀統集、因書緣起如此。

甲寅孟夏二日

谷文晁

文晁は「花朝」二月一五日の「後七日」、つまり寛政六年（一七九四）二月二二日、諸家友人の所蔵する真筆古画を出品請求し、感応寺で展示会を催した。春の展示に相応しく晴れてのどかな日で、蘭亭の勝会を慕い、西園の雅集になぞらえ楽しんだ。そのさい名人の手をまねて臨写し、それらは迫真的な作品となった。そこで縮写図を副本（『書画甲観』）とし、さらに自らの拙い作品を加え九羽の鶴も描き入れた。『書画甲観』を同好の士に配布するが、もれた作品や知らない作品があったら知らせてほしいという。文晁はそれらの作品を加え、『書画甲観』の続刊を考えていたのである。

この年の夏、文晁は江戸より白河に向かった。前年將軍補佐役、老中職を免ぜられた松平定信は、白河への帰藩が許されたからである。寛政六年六月一日に江戸を立ち、文晁、余語克俊（北門）、石井恒右衛門らが扈從した。

六月二二日、一行が小山に着いたとき、『退閑雜記』によると、好古癖の文晁は「思川のつ、みより堀出した陶器」、また天王院の古文書、兜、軍扇などすべてを模写した。また翌一三日には、小金井の慈眼寺で山門扁額を模写しようとするが、移動困難のため断念した。

一方、余語克俊は、一二日に乙女村の泉龍寺山門扁額の模写を申しで、一三日には宇都宮の清嚴寺鉄碑を摺り写した。文晁、余語は道中の古物を模写しつつ、六月一六日白河に着いた。

白河で生活してから二か月後、文晁は松島へ出かけることとなった。松平定信は、毎年塩釜明神に家臣を代参させていたが、この年は鶴飼貴重が参詣の任にあたり、「八月十五夜の月を松島にて見たきといふ」

文晁も同行させたのである。

八月一〇日、文晁は白河を出立し、奥州街道北上、須賀川、福島、白石、仙台を経て八月一五日に塩釜に着いた。翌日塩釜明神を参拝し、その夜、神官藤塚知明と観月に浸った。文晁は挿図入りの『松島日記』（松島絵日記）を著すが、この中の《法蓮寺勝画楼眺望図》は、満月下の松島湾支湾風景図で観月の様子を描く。文晁は天明七年（一七八七）すでに松島を訪れ、『塩釜松島図巻』を上木していた。今回の塩釜観月会では、興に乗じて笙や笛を演じとあるから、文晁は先の松島旅行の思い出なども話し合っただのである。

その後、文晁は松島へ行き、瑞巖寺を見学、北上して二二日に中尊寺金色堂、二二日に毛越寺へ行き、これよりひき返して古川、仙台に向かった。『松島日記』は、仙台城下の玄関口である増田駅（名取市）の八月二四日の記述をもって終わる。日記の奥書から、寛政六年九月、文晁は仙台にいたとわかる。およそ一か月の旅行中、文晁は笠筒神社、塩釜祠堂などの風景図、仏像・彫刻・碑、動植物、民間の生活用具などを写生した。

文晁の《陸奥七奇》は、残念ながら写真で見ただのみであるが、多賀城古瓦、塩釜明神鉄燈銘、鎮守府古瓦、田村庄土中所得鏃、宮城野萩花、安積沼花嘉都美、鳥の七奇が見られ、「寛政甲寅（六年）冬十一月写記」と款記される。すべて奥州の古物や動植物である。植物の二点は『松島日記』の挿図にあり、塩釜明神鉄燈銘は『集古十種』鐘銘に記載される。すると文晁の松島観月旅行には、『集古十種』ための古物探索も兼ねていたと思われる。

文晁は松島観月旅行のさい、『松島日記』のほかに奥州各地の風景写生図も描いた。標題が書かれていないため《奥州風景写生図》とか《東北地方写生図》などといわれ、安達から平泉までの真景図による紙本墨画の画巻である。巻末に、「甲寅冬日写筆」とあり、文晁が、寛政六年冬に白河で完成させた作品とわかる。後述する木村謙次の紀行集『小

峰城逆旅偶筆』に、「谷文晁子に命ぜられて、奥州の名勝を遊覧せしめ、これを悉く図絵せしめらる、高館秀衡の旧跡まで至れりと云」とあり、これは文晁の《奥州風景写生図》を指すと考えられる。松平定信は、奥州名勝の真景図を描くよう文晁に命じていたのである。

文晁が白河に来たとき、白河城三の丸の庭園・三郭四園は造園中であった。三郭四園は回遊式庭園で、月池と亭子などの西園、池泉太清沼と茶室などの南園、湖と茶亭などの東園からなつた。西・南・東園のうち最初に造園されたのが、三の丸御殿と平行して進められた南園であり、寛政六年に作庭された。

文晁は、南園を描いた。《楽翁公下屋敷真景図》という紙本墨画で、「甲寅冬十月写 於小峰山房」と款記される。この真景図は、背景に那須連山が描かれるから、西を向き南園をとらえたのであろう。亭榭・滝・橋などが見られ広大な苑地とわかる。南園には三十有余の景勝地があり、文晁はおそらく、それら景色を描いたであろうから、《楽翁公下屋敷真景図》は、景勝図の下絵の一枚と考えられる。

文晁は、小峰山房で余念なく制作に邁進した。冬枯れの林と背後に、鋭くそびえ立つ雪山をとらえた《雪景山水図》(栃木県立美術館蔵)は、「甲寅冬十月写於小峰山房」とあり、寛政六年十月に小峰山房で制作された。このほか《松島雨霽図》(仙台市博物館蔵)も、「乙卯(寛政七年)春日写於小峰山房」と款記され、文晁の工房小峰山房での制作である。前景に瑞巖寺と家並、遠景に金華山をとらえ、雨あがりの松島風景を描く。文晁は、寛政六年の松島旅行を思い出しつつ制作したのであろう。同様に文政九年(一八二六)の《松島曉景図》も、松島での体験を思いつつ制作した墨画といえよう。

文晁の白河での滞在六か月後、寛政六年十一月、常陸出身の北辺探検家木村謙次が文晁を訪問した。木村謙次は、名を謙、字を子虚、号を醉古といい、『小峰城逆旅偶筆』を著し白河での見聞を書きとめた。

木村は、寛政六年十一月九日に白河に入り、翌一〇日新倉町の医師

芳賀知三を訪ねた。ここに留まること六日間、その間白河藩士の関戸衛守や谷文晁らと会った。『小峰城逆旅偶筆』に、

谷文五郎等ヲ訪ヒ、谷子ノ画ヲ乞ヒ、シバシバ叩尋シ、披懐旧知ノ如シ。

とある。「披懐」とあるから、兩人は胸襟をひらき打ちとけた。そこで文晁は、白河周辺の古物探索を勧め、木村は十一月一日に白河を出、近くの安積地方の碑や鐘鼎を調べた。白河に戻ったのは、同月二五日であった。その後も木村は文晁を訪ねるばかりか、白河藩士で俳人の玉生忠八(普江)、関戸衛守らと閑談したのである。

木村は、文晁の弟子亜欧堂田善について興味ある報告をしている。

今年御抱二長崎人石井常衛門(恒右衛門)ト云人有。玉生忠八ナド門人ナリ。天学ハ浅井四郎衛門ト云人御抱トナリ、当時白川エ下リ往ス、須賀川駅紺屋善吉(四半)里数土圭ヲ見取造レリ。画ヲ好ミ谷文晁ヲ師トシテ、近比両刀ヲユルサレ、扶持ヲ賜リ、画ヲ習ベキトノ命ナリ

石井恒右衛門は、馬田家の養子となって馬田清吉と称した阿蘭陀通詞である。長崎に遊学した大槻玄沢が、天明六年(一七八六)三月江戸に帰るさい、玄沢に同行して江戸に出た。柳生肥前守の邸にいた石井は、寛政四年定信に禄仕した。江戸での石井は、稲村三伯や宇田川玄随らにオランダ語を教えたが、三伯からフランソア・ハルマ著『蘭仏辞典』(F. Halma: Woordenboek der Nederdutsche en Fransche Taalen)の訳稿を依頼された。蘭日辞典の必要を痛感していた三伯は、師玄沢所蔵の辞典を借りての依頼であり、背後に玄沢の口添えがあったことは間違いない。

石井恒衛門(庄助)は、『蘭仏辞典』の翻訳を白河でおこなうばかりか、藩校立教館でオランダ語を教えたのであろう。玉生忠八は受講した一人であった。石井の辞典訳稿をもとに、三伯や宇田川玄真らが校訂編纂し、寛政八年二月一八日完成させたのが『波留麻和解』であり、

わが国最初の蘭日辞典であった。

立教館で蘭学を講じたのは、石井のみではなかった。浅井四郎右衛門（政礼）も天文学を教えた。板沢武雄氏による子爵松平定晴所蔵書調査によると、定信は次のような蘭書を所有していた。

Gronden der starrenkunde, gelege in het Zonnestelzel bevatlijk gemaakt; in eene beschryving van 't Maaxsel en Gebruik der nieuwe Hemel- en Aard-Globen; en in 't Gebruik deezer Globen ter oplossing der klootsche Driehoeken en klootsche Werkstukken der Starrenkunde.

「天文学基礎、新天球・地球両儀の製作並びに使用の記述で、また天文学の球形切断三角面並びに球形問題にたいし、この両儀の使用法をわかりやすく述べる」と訳せる。逐語訳したのは、これ自身が独立した書でなく、新製天球・地球両儀に付けられた製作・使用法の説明書であることを理解してもらうためである。これは一七七一年、アムステルダムのクリピントとハルトマン書店から出版されたが、原本はジョージ・アダムスが販売した天・地球儀に添えた英書であった。定信は、ヤコブ・プロース (Jacob Ploos) の蘭訳本を所持していたのである。

定信は寛政三年（一七九一）、阿蘭陀通詞本木良永にこの蘭書の翻訳を命じた。良永は、一年あまりをかけて翻訳し、寛政五年に『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』という訳題で幕府に献上した。²⁾ 浅井礼政は、定信に戻された『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』を漢訳し、『読訳蘭製球書』七巻とした。これも定信の命による漢文体の書であるが、板沢氏の報告によれば、「立教館図書印」が捺され、各巻に「日本 白川 物礼政奉君命撰」と記されていたとい³⁾う。浅井が立教館で講じたのも、この漢訳書による天文学であった。

先の『小峰城逆旅偶筆』で、亜欧堂田善（永田善吉）が「里数土圭ヲ見取造レリ」と書かれているが、これは天学・暦学に必要な浅井の

算術的知識を借りての製作であったと思われる。

「両刀ヲユルサレ、扶持ヲ賜リ画ヲ習ベキトノ命」を受けた亜欧堂田善は、寛政六年冬白河城下におり、文晁に師事していた。もつともそれより数か月前、田善は領内巡視中の定信に絵画技量を認められ、随従していた文晁のもとで学ぶよう命じられた。このとき岩瀬郡須賀川で田善と出会った文晁は、手控画帳ともいえる『画学斎過眼図藁』に田善の肖像を描き、「奥州須賀川駅永田善吉（田善）対真如此 甲寅秋日写也」と款記した。対真とあるから、四七歳の田善を向きあつて描いたのである。

郷里須賀川をすぐに去って、白河に移った田善は、文晁から西洋画法を学びつつ、石井恒右衛門と接したと思われる。田善はのちに簡単なオランダ語を学んだが、蘭学の最初の師は、恒右衛門であった可能性が高い。

三、寛政八年の文晁

(一) 畿内の訪古探勝

寛政八年（一七九六）の文晁の活動を知るには、文晁の『過眼録』、写本の『大和巡画日記』、広瀬典の『有方録』などが必見となる。『過眼録』は、林若樹氏が、寛政八年から文化四年までのものを所有されたが、現在は所存不明とのことである。しかし、寛政八、九年の分は、周知のように『集古会誌』、『集古』に一九二二年九月より掲載された。しかも複製版も出版されているので、容易に目にすることができる。これらは、寛政八年文晁の必須資料であるから、以下の活動調査も先達の記述と一部重複するかもしれない。

寛政八年五月二八日、文晁は藩主定信の命を受け、畿内の諸社寺什宝の調査にでかけた。このとき弟子の喜多武清を連れ、白河藩儒者で昌平齋で学んでいた広瀬典も加わり、一行は江戸を立った。広瀬典は

字を以寧、通称台八、蒙齋と号す。京都で文晁と別れて長崎に向かい、各地を長年遊学したばかりか、白河藩立教館学頭となって藩政にもかかわった人物である。

一行は六月一日館林、三日太田、四日高崎、妙義山に登り、八日諏訪、九日塩尻、中津川、岐阜、大垣を経て十六日守山、十七日に京都に至った。中山道を通つての西上であつた。

京都の最初の調査と日付はわからないが、大徳寺に赴いていたのであるうか。『過眼録』は、六月二四日から始まる。

六月二四日、梅尾高山寺に行く。文晁は、明恵上人再興の真言宗高山寺の什宝である明恵上人筆文珠種子曼荼羅、春日曼荼羅・能野曼荼羅など十数点を見た。その中に「鳥羽僧正筆戲筆 四軸」とあり、末尾に「廿四日同観橋本肥後守・田中訥言・成瀬正胤、此日鳥羽僧正戲三卷文晁・訥言・正胤摹」とある。橋本肥後守は、京都梅宮の神宮で肥後守に任ぜられた経亮であり、有職故実に詳しく和歌を愛した国学者である。田中訥言は、京都の土佐派の画家で、寛政年間初め御所造営のさい、禁裏の障壁画制作に参画していた。成瀬正胤は京都の絵師と思えるが、詳しくはわからない。

戯画は、平安後期から鎌倉初めにかけて制作された白描戯画絵巻《鳥獸戯画》をさす。甲乙丙丁の四巻からなる。「戲三卷文晁・訥言・正胤摹」とあるのは、甲乙丙三巻を臨模し、粗雑な描写の丁巻を省いたのであろう。

六月二五日、文晁は黒谷、真如堂、保科寺、下加茂社を巡る。

同月二六日、誓願寺に赴く。

同月二七日、円山主水、岐阜八郎兵衛、沢五竜らと智恩院へ赴く。

その後「月渓」こと松村呉春が加わり、大仏の妙法院宮什宝を見学。さらに相国寺に向かった。円山主水は、すでに没した応挙でなく、息子の円山応瑞である。月渓は四条派の始祖呉春の号である。

七月二日、相国寺の塔頭光源院に向かう。

同月三日、青木春塘宅にて、大雅堂の山村馬市図、祇林春景図を見学す。春塘は、画家青木夙夜である。伊勢松坂から京都に出、池大雅に学んで山水画に長じた。大雅没後、二世大雅堂を名のり東山の大雅堂に住したから、文晁はこの日、東山に足を運んだのである。

同月四日、建仁寺の正伝院、両足院を巡る。琴碁書画図や花鳥図などを見学。

同月五日、高台寺に行き、什宝十六羅漢図十六幅を見学。夜、萩野左衛門宅に行く。

同月六日、北野社に行き、同社の縁起絵巻などを見学。その後、佐野少進が加わり天竜寺・妙智院を巡り、さらに三秀院に向かう。妙智院の策彦和尚像一幅は、のちに江戸に送られて臨模されたと思われるが、『集古十種』の古画肖像に載る。

同月一三日、大徳寺竜光院、総見院、聚光院、方丈、大仙院、六条道場を巡る。『過眼録』では、大徳寺の什宝五十数点をあげる。なかでも竜光院の牧溪筆栗柿二幅、総見院の牧溪筆猿猴、方丈の牧溪筆三幅、中に観音・左右に竜虎の大幅と猿鶴の二幅は、『集古十種』の名物古画に掲載される。方丈の牧溪の五点については「世伝云五幅対牧溪云々」とある。その後円山応瑞宅、茶人の千元質宅にて絵画や千利休木像などを鑑賞する。

同月一五日、本法寺、南禅寺に赴く。南禅寺什宝として二十数点あげ、そのうち「半窓疎而 幽谷潜竜」と款記された趙子周筆墨竹二幅は、『集古十種』の名物古画に載る。

同月一六日、橋本経亮と五条八幡へ行き、ついで木下弥一兵衛と永観堂什宝を見る。また藤叔藏の持参した十二類絵摹本を見る。

同月一八日、石山寺へ行き、同寺の縁起絵巻、密巖僧正の家蔵品を見る。ついで東寺宝菩提院に行く。

同月二〇日、三井寺観音堂、本能寺を巡る。

同月二一日、橋本経亮より届いた北野新縁起六巻を見る。おそらく

同日、京都寺町通りの堺屋長左衛門の所蔵品四十点あまりを鑑賞したのであろう。

同月二五日、大坂の木村兼葎堂、升屋平右衛門を訪ねる。『兼葎堂日記』に、「谷文晁始来 廿五日 江戸谷文五郎弟子喜多栄之介森川同伴来」とある。「始来」とあるから、文晁の兼葎堂訪問は、寛政八年七月二五日が最初であった。

同月二七日、升屋平右衛門宅を再訪す。平右衛門は、大坂の豪商山片重芳である。升屋は仙台藩の御用商人であったから、平右衛門は寛政七年、仙台下向し、このとき日記『旅譚』を記した。平右衛門は、仙台で手厚くもてなされたばかりか、江戸で大槻玄沢や司馬江漢と蘭学の話に興じ、五月八日に「白川侯ノ別業ニ招カル」とある。定信と知友の間柄であったことが、文晁をして升屋を訪ねさせた、と思われる。

同月二八日、兼葎堂を訪ねる。『兼葎堂日記』に、「廿八日昼過谷文五郎 終日談話」とある。

同月二九日、直指庵を訪ね、中寺町大通寺の御開帳を見学。

閏七月二日、兼葎堂を訪ねる。『兼葎堂日記』に、「二日 谷文五郎 森川来」とある。

同月三日、西渠甚兵衛宅、紙屋鈴木治三郎宅、油屋春岳川崎屋太郎左衛門宅を訪れる。

同月四日、瓦町の西村庄兵衛宅にて所蔵兵器類を中井淵蔵と見学す。

同月六日、兼葎堂宅、浜田希庵宅に行く。浜田希庵は、号を杏堂、大坂の医者で画を好み山水花卉画を能くした。『兼葎堂日記』に、「谷文五郎 中食 森川同伴 三井元孺雅会行 玉堂文晁等出会 四ツ過帰」とある。文晁は三井元孺の雅会で浦上玉堂を知った。

同月二二日、「谷文五郎 森川同伴出立迎申候」とある。

同月二四日、「谷文五郎 喜多栄之介同伴暇乞来」と『兼葎堂日記』にある。

西遊する文人墨客のなかで、兼葎堂を訪問しない者はまずみられず、

文晁もその一人であった。兼葎堂は酒造を業とし、画詩煎茶などを好んだ文人である。およそ二万巻の和漢洋の書籍のみならず、書画・古銭・草木・地図・魚貝などを所有した。好事好古の癖のある文晁にとって、兼葎堂の所蔵物は驚きであったろう。文晁は、兼葎堂訪問のさい、よく「森川同伴」とある。森川は、大坂の画家森川竹窓である。古法帖を学び、南画を能くし、とりわけ竹画を得意とした。天保元年、六八歳で没している。文晁は閏七月二四日、兼葎堂に暇乞いをし、九月から一〇月にかけて大和紀伊の諸社寺什宝の調査にでかけたのである。

(二) 大和、紀伊の訪古探勝

『過眼録』における九、一〇月の大和紀伊諸社寺巡視には、日付がなく社寺の什宝を一括して列記する。そこでより詳しく知るには、『大和巡画日記』が参考となる。『大和巡画日記』の原本はなく、写本のみ知られる。写本も各種あるらしい。西村貞氏は、光珠院旧蔵本で保井芳太郎所蔵本を見たようで、その標題を『大和巡覽画日記』としている。また東北大学図書館所蔵本は、天保一二年（一八四一）の写本である。後者を参考としたが、同時に長岡由美子氏がこれを翻刻されておられ活用させていただいた。

原本はそもそも、「原本無題号今案可如此題」とあり、天保一二年の段階で『大和巡画日記』と命名されたとわかる。『大和巡画日記』は、「寛政乙卯（七年）」とあるが、『過眼録』と照らしあわせ、寛政八年の内容と判断できよう。末尾に、「天保十二年辛丑八月写 画禽江 書全海」とある。西村禽江が画を、全海（采歴不詳）が書を担当した。

『大和巡画日記』は、寛政八年九月三日から同月二〇日までの巡視録である。しかし、日付が前後するため注意を要す。

文晁は九月三日、猿沢の旅舎を出て興福寺に向かった。以下文晁の巡視日程である。

九月三日、東大寺、元興寺極楽院を巡り、東大寺什宝朝倉義景硯を写す。『集古十種』の文房に同硯図を載せるが、「京都本能寺藏朝倉義

景観図」とある。東大寺にて恒例の転害会八幡祭礼があり、舞楽を見る。

四日、弘仁寺、菩提山宝蔵院を巡る。弘仁寺にて小野篁像を写すにあたり、寺僧が洩るのを後世に伝えるためと説得し、臨模に成功する。「集古十種」の古画肖像に「小野篁卿」として載る。

五日、子敬長蔵持参の空海の書、松井和泉古梅園所蔵の花鳥画、墨竹画などを見る。

六日、午前には眉間寺、午後には興福寺の塔頭賢聖院、凌雲院、宝珠院などを松井和泉、喜多武清らと巡る。眉間寺で四聖御影図を写し、中央の聖武帝御影は『集古十種』の古画肖像に載る。

七日、古梅園収蔵の行成三行をはじめ一三軸の書画を見る。春日社若宮、興福寺、東大寺へ行き什物を模写す。東大寺では印章、仏具如意、銅器柄杓や仏舍利、文房具硯や卓、楽器鉦鼓や古面、さらに瓦や馬具などを写す。これらのうち俊乘上人所持鉦鼓の斜視図と背面図、側面図加えた良弁僧正磁硯、東大寺勸進所蔵の大仏殿古鏡は、『集古十種』の楽器、文房、馬具に載る。

八日、春日社司宅で春日神影二幅を見、春日社人若宮宮内を訪ね、古文書数帖を写す。古文書は社頭之諸日記、行成書（前日調査の行成三行か）であろう。

九日、佐保山、不退寺、元興寺、春日社を巡る。文晁は佐保山風景図を描く一方、同山碑、不退寺の在原業平像を写す。これらは『集古十種』の碑銘、古画肖像に載る。

一〇日、転害会八幡宮に行き、鳳輦並びに神宝を見学す。興福寺東金堂にて文殊菩薩、維摩居士の両木彫坐像を写す。

十一日、正覚寺、極楽院、海竜王寺、法華寺、西大寺、尼辻地蔵を巡る。極楽寺にて上宮太子二歳像を写す。「集古十種」の古画肖像に、「聖徳太子大和国極楽蔵伝云二歳像」として載る。

一二日、伊佐川明神（子守社）、戒壇院を巡る。戒壇院の宝物を見学し、戒壇院並びに院内の四天王像を描く。

一三日、興福寺の塔頭勸修坊の什宝を見学す。「賢聖院（興福寺の塔頭）代官宮城左近案内」とある。御霊祭があり、御霊祭りもの図を描く。

一四日、東大寺年預北苑院の執金剛神縁起、転害八幡縁起を見る。

一五日、喜多武清、郡山藩士東野徳勇と法隆寺、河内壺井八幡に行く。春日社人若宮宮内持参の大安寺旧記、東大寺宝物目録を見る。

一六日、東野徳勇が、法隆寺より名香木の竜田楓二株を持ち帰る。

一七日、南都を立ち、帯解地藏堂、本光寺、長谷寺、柿本寺、布留社、良因寺、竜福寺、内山金剛乘院永久寺、大和大明神、長岳寺金剛身院、普賢院、傘堂、穴師大明神、大三輪寺などを巡る。柿本寺で柿本人麿木彫、良因寺で同寺額などを写す。永久寺の頼実上人木像は『集古十種』の古画肖像に、長岳寺の能登守教経矢は兵器に、帯解地藏堂・良因寺・長谷寺・長岳寺・布留社の額は扁額に載る。

一八日、前日の夜より庚申待のため文晁も参加し、村人と酒宴に興じる。三輪旅舎を早朝に立ち、初瀬川を渡り、三輪平等院、織城御懸神社、慈恩寺旧跡、一鳥居、長谷寺、室生寺、談山妙楽寺護国院、岡寺、橋寺などを巡る。多武峰護国院で藤原鎌足像を写し、『集古十種』の古画肖像に載せる。途中、下多武峰や岡寺付近の風景を描く。

一九日、土佐駅（奈良中西部高取町）を出発し、壺坂寺、吉野蔵王堂、宝蔵院、吉水院、実城院、竹林院、釈迦堂、如意輪寺、安禅寺、西行若水寺などを巡る。文晁は村上彦四郎所持の卒都婆鍔を写し、これは『集古十種』の刀剣に、「大和国吉野山桜本坊蔵村上彦四郎鍔図」とある。また後醍醐天皇御旗を写し、これは『集古十種』旗旗にある「大和国吉野郡賀名生郷和田村堀源次郎家蔵（三十三番）」に該当しよう。さらに吉野山蔵王権現所蔵の後醍醐天皇御物である七文字笛と高麗笛を写すが、ともに『集古十種』の楽器に浄写されて載る。途中、吉野山桜図を描く。

二〇日、栄山寺、宇智川碑、観音寺、大沢寺、良峰寺、月見寺、安井寺、霊安寺、桜井寺、鳳凰寺などを巡る。栄山寺で藤原武智麿像を、

また同寺近くの宇智川の磨崖碑を写す。ともに『集古十種』の古画肖像、碑銘に載る。途中、栄山寺風景図を描く。文晁はその後、宇智郡五條駅に向かい、夕方吉野川を臨む旅舎に着いた。『大和巡画日記』に、「黄昏橋本旅舎々乃傍吉野川眺望最可愛也」とある。

文晁の大和訪古探勝の旅は、以上のようなものである。しかし抛りどころとした資料『大和巡画日記』には、唐招提寺、薬師寺、当麻寺など奈良の名刹とされる寺院が記載されない。そこで文晁の『過眼録』をみると、それらの寺院が記されているから、採訪諸社寺名のみを列挙しておこう。

知足院・元興寺・興福寺・弘仁寺・菩提山宝蔵院・眉間寺・春日社・東大寺・十輪院・転害会八幡宮・不退寺・般若寺・唐招提寺・薬師寺・西大寺・矢田寺・当麻寺・法隆寺・岡寺・多武峰護国院・般若院・三輪平等院・三輪大御輪寺・柳本寺・正行院・円城院・観行院・賢聖院・慈尊院・長谷寺・橋寺・吉野蔵王権現・栄山寺である。文晁の大和訪古探勝の旅は、『大和巡画日記』と『過眼録』とを照らしあわせて見る必要がある。

文晁は、大和の諸社寺調査をおえたあと、高野山へ向かい、その後熊野本宮・新宮・道成寺・大同寺・吹上寺などを巡った。

文晁は紀伊の旅にあつて、熊野本宮から新宮まで舟遊した。紀伊山地から発した十津川は、下流で熊野川となり、上流の本宮から貫入蛇行し、新宮で熊野灘に注ぐ。川幅が広く深谷美に富んだ流路である。本宮から新宮まで九里八丁の距離のため、九里峡と呼ばれた。文晁は、舟旅にさいし九里峡の真景図を描いたのである。

享和二年（一八〇二）、紀伊和歌山藩の儒官菊地元習（西臯）は、熊野権現、熊野速玉大社、那智大社を回り、その体験を『三山記略』にまとめた。その巻頭に文晁の九里峡図が載り、「寛政丙辰秋九月写于熊野舟中文晁」の款記がある。丙辰は寛政八年、九月は同月二〇日まで大和にいたため、九月下旬となる。

文晁は、寛政八年の九里峡図を基に文化元年（一八〇四）『熊野舟行図巻』を完成させたと考えられる。図巻の巻末に、

此熊野舟行図昔日過目真景也 文化元年春三月応命製之 谷文晁とある。熊野川兩岸の風景で、画中に地名を記した小貼紙を付した絹本着色二巻である。

文晁は、西洋の鳥瞰遠近法や中国の三遠法中の平遠山水を駆使していよう。鳥瞰遠近法使用といっても河川の一部は短縮され、視点は固定せず常に移動する。近山から遠山を望見する平遠山水は、渺茫たる水域風景描写に適していよう。熊野川対岸の遠山は、霞や雲がたなびき限りなく広大な情景を展開する。『熊野舟行図巻』は、高価で良質な絵具を不断に使用した色彩の美しい絵巻であり、かつて紀伊和歌山藩の末裔徳川頼貞の蔵品とされる。

文晁は紀伊の諸社寺を巡ったあと、江戸でなく再び大坂に向かった。兼葭堂を訪れたのである。『兼葭堂日記』に、

十月三日、谷文晁紀州帰来

十月四日、早朝森川へ行 谷文晁発足 同伴心齋橋迄送り帰る

とある。文晁は、大坂で世話になった兼葭堂や南画家森川竹窓宅に向き、暇乞いをしたのである。兼葭堂に見送られた文晁は、十月末には、江戸に帰着したと思われる。

寛政八年の文晁の大和紀伊旅行は、『集古十種』編纂のためであった。訪問さきで描いた兼葭堂の縮画は、近世肖像画の白眉とされる一点『木村兼葭堂像』（絹本着色）を生みだした。画面に、「享和二年三月廿五日社弟文晁稽首拜写」と款記され、文晁の朱文方印が捺される。兼葭堂は、享和二年一月二十五日に亡くなり、遺族から知らせを受けた文晁は、没後一か月後に肖像画を制作した。面長で大きな鼻と耳の持ち主、兼葭堂の笑った姿である。社弟とか稽首と款記されているから、文晁は敬う気持を込めたのであろう。

四、寛政九年の文晁

(一) 江戸での訪採

文晁の『過眼録』一〇までは、寛政八年の展観目録である。一一から江戸の展観目録が並びあげられる。ここでも日付は統一されておらず、かつ欠けた部分もある。主要事項を順を追ってあげておきたい。

文晁は江戸に戻ってきて、『集古十種』の編纂に積極的に協力した。正月五日、鑑定家菅原洞斎宅にて王元章の墨梅図双幅を見学。元章こと王冕は元の画家、墨梅や竹石画に長じた。

九日、雪舟の潑墨山水二幅を鑑賞。

十一日、海棠庵にて巢雲の吉兆画報平安図を見る。

一八日、日暮里の南泉寺にて明の画家呂記、周之冕、元の画家梅道人（呉鎮）、画僧兆典（殿）司らの花鳥画、墨竹画、羅漢像などを鑑賞。

二〇日、浅草寺塔頭の長寿院にて、高野山清浄心院、金剛三昧院などの什宝である明の画家文徵明、仇実父（仇英）、呉鎮などの作品四二点を鑑賞。

二三日、持明院基老卿の書伊勢物語を見る。

二月六日、蛭川大和守所蔵の大坂観心寺古文書摹本を見る。

七日、亀屋久右衛門の持参した定家の百首草案一卷を見る。

一二日、図入り織製法の小島乙之丞著織工志略記を見る。

一三日、蛭川家にて近藤又兵衛著新編江戸志七冊などを見る。

二一日、牛込の禅宗寺濟松寺の茶会に参加し、梵僊の書「東翔」を鑑賞。

三月一日、井上元親が、法然上人絵伝三卷を持参す。白河藩邸に赴き、徐葆光の孔子像などを見学。

二〇日、松平定信の『退閑雜記』を目にする。寛政六年より書きはじめられた『退閑雜記』は、同九年に一三卷が成立し、その後、続編が書きつがれ、後編二卷が成りたつたとわかる。

(一一)

二一日、中川飛驒守忠英著清朝俗間式一二冊が来る。これは『清俗紀聞』をさし、忠英が長崎奉行のとき、手付出役の近藤重蔵に命じて編纂させた乾隆時代の江南の風俗記録である。完成してわずかののちに、文晁は見たことになる。

四月一日、京都の橋本經亮より曾我物語が来る。

二六日、橋本經亮より源心僧都の太秦広隆寺牛祭図が来る。並びに藤貞幹編纂の『集古図』二二卷を見る。集古図は、『集古十種』の什宝分類方式に役立てたかもしれない。

五月二日、伊予松山藩邸で明の画家唐寅の蘭竹卷を見る。伊予松山藩主松平定国は、定静の婿養子となった定信の兄（豊丸）である。

一二日、細川越中守所蔵の唐の画家呉道玄の大幅孔子像を見る。

一七日、松平下総守忠知藩邸でトトニヤウ全六冊を見る。これはレムベルトウス・ドドネウス著『植物図譜』（Rembertus Dodonaeus: *Cruidt Boeck*）をさす。この蘭書は、一冊本としてわが国に舶載された。なぜ「全六冊」としたかわからない。石井広助（恒右衛門）は、定信の命によりこの蘭書を翻訳し、『遠西本草攬要』とするが、文晁は訳本の方を見たのであろうか。

一八日、伊予松山侯所蔵の墨本秋萩帖を見る。

一九日、秦檜丸が来る。檜丸は、おそらく尾州大須真福寺書籍目録や鎌倉光触寺焼陀縁起などを持参した。

以上が、寛政九年正月五日から五月一九日までの文晁の活動である。『過眼録』は五月一九日以後、次の展観目録は六月一四日である。その間、およそ一か月の空白となる。実はこの間、文晁は定信の命を受けて、鎌倉江之島諸社探訪にでかけたのである。したがって、『過眼録』の六月一四日以後の展観目録は、鎌倉探訪後の記述となる。

(二) 鎌倉、江の島での訪採

文晁の鎌倉・江の島の訪古探勝の旅については、夙に写本『文晁好古紀行』が知られていた。しかし何年のものか記述がなく、私見とし

て寛政四年から同十年の間に書かれたと述べたが、今回寛政九年の紀行と判明した。鶴岡明美氏の東博所蔵の『相州名勝図帖』と東大総合図書館蔵の『文晁紀行』の調査による。今回、従来⁶⁾の写本のほか鶴岡氏の論文も参照させていただいた。

絹本着色の『相州名勝図帖』は、浄写本と思われる、次の八点の風景図が掲載される。

- 一、丁巳（寛政九年）五月廿一日過此権陀坂真景図 二、廿一日停午下信濃坂十塚真景図 三、廿一日黄昏過笠間村暮到鎌倉図 四、錦屏山中徧界一覽亭眺望図（廿二日午後到此） 五、山内伝宗庵眺望図（五月廿七日到此） 六、廿九日朝到于此甘繩長谷寺真景也 七、七里浜図（廿九日過此） 八、江島洞口望西図（丁巳夏五月廿九日到此）

右の地名のうち、笠間は、十塚（戸塚）宿から鎌倉鶴岡への通道を存す村名。錦屏山は瑞泉寺背後の山で、瑞泉寺の号。徧界一覽亭は、瑞泉寺山頂の建物。甘繩は、長谷の東部一帯をさす古称名。江島洞口は、江島神社奥院の南端にある海食稚児ヶ淵である。

八点すべて真景図である。南宋の五山をまねて設けられた鎌倉五山建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺は描かれず、四点の図中遠方に富士山が登場する。鎌倉・江の島での調査は、文晁にとつて訪古探勝の旅であったといつてよいのであろう。八点の真景図から旅の経路をわからせる。『相州名勝図帖』や『文晁好古紀行』などを参考にしつて具体的な旅程をみておこう。

文晁は、五月二一日江戸を立った。武蔵と相模の国境権太坂を経、東海道の宿場町十塚をぬけ、同日夕方笠間村を過ぎ鎌倉に到着した。翌日より調査を開始する。

五月二二日、覚園寺、来迎寺、荏柄天神社、瑞泉寺などを巡る。一遍上人像、菅原道真木彫、足利基氏像、足利氏満木彫、天神画像、さらに太刀などを写す。これらは『集古十種』の古画肖像、刀剣に記載

される。

二三日、建長寺、長寿寺、明月院を巡る。北条時頼木彫、足利尊氏木彫、上杉道合像などを写す。これらは、『集古十種』の古画肖像に載る。

二五日、朝雨もやみ、円覚寺へ行き、次いで雪の下を経へ由比が浜に向かい、尋古寺、延命寺、安地藏、別願寺、安養院、常楽寺などを巡る。円覚寺にて伏見院宸筆、山門の花園院宸筆、総門の後光厳院宸筆の扁額を写す。『集古十種』の扁額に載る。夕方、客舎に帰る。

二六日、亀谷寺、寿福寺、桂蔭庵などを巡る。寿福寺にて源実朝木彫を写す。『集古十種』の古画肖像に載る。

二七日、鶴岡八幡宮へ行き、太刀・弓などの武器、硯、硯箱などの文房具を見る。『集古十種』の兵器に「源頼朝公弓」「杏葉太刀」「太刀」とあり、文房に「源頼朝公硯并箱皆具」「源頼朝公馬蹄硯」とあり、銅器に「政子十二手箱中鏡」とある。

二九日、長谷寺に向かい、次いで七里ヶ浜、江の島へ行く。長谷寺、七里ヶ浜、江の島の風景図を描く。

六月二日、早朝客舎を出、報国寺、浄妙寺、寛喜寺を巡り、朝比奈切通しを経、六浦津に向かい、日暮れに六浦旅舎に着く。

三日、金沢の諸社寺を巡る。

以上が、文晁の五月から六月にかけての鎌倉での訪古探勝である。その後の文晁の様子は、再び『過眼録』に戻らなければならぬ。

(三) 寛政九年六月以降の江戸での文晁

文晁は鎌倉より江戸に戻つても、『集古十種』編纂のためにかんがりの絵画を囑目した。

六月一四日、白河藩邸で大和より送られてきた多武峰慈門院の藤原鎌足像と多武峰縁起三巻を見る。鎌足画像は、『集古十種』の古画肖像に載る。

一七日、西村元隣持参の明の絵画柳陰観瀑図を見る。

二一日、医師片倉元周持参の沈襄の墨梅図、元の文人画家黄公望の山水画、周東邨の竹林清嘯図、明の画家呂紀の花鳥図四点を鑑定。

二二日、喜多武清所蔵の夏奎（珪）の江南漁楽図を見る。

二三日、中村弥太夫所蔵の古印を見る。

七月四日、次章で述べる白雲らによる金沢での神将模写図一二幅を囑目。

五日、白河藩邸に赴き、明の絵画を見る。

一日、沈南蘋の蒼松双白鶴図を見る。

一三日、蟠川大和守藩邸に行く。

二六日、鳥越の伊勢源右衛門宅にて、明の画家呂記（紀）、明の文人画家文衡山（文氏）、明の画家陳子和らの花鳥画や山水画など、中国の書画六〇点を見る。

閏七月六日、屋代弘賢宅に赴く。

二八日、柳河藩主立花左近将監の所蔵する元初の画家銭舜举（銭選）、明の画家仇英、呂記（紀）らの書画二三点を見る。

二九日、寛政七年、長崎奉行手附出役となった近藤重蔵が、在勤中著述し、かつ入手した資料を持参した。『瓊浦愛機』、南巡図、唐船仕役図、坤輿万国図などである。

八月五日、鑑定家で茶道に通じた古筆了意の所蔵する小倉色紙書付を見る。『集古十種』に、「法帖 定家卿真蹟小倉色紙」として載る。

九月一日、文晁は百俵の俸禄を賜わり、五人扶持となる。

一九日、水戸の函徳亭にて張端綸（淮叔）、蘇東坡（蘇軾）、趙子昂（孟頫）ら主に中国絵画二六点を見る。次いで日付はないが、白河藩邸に赴き、平治元年琵琶を見たが続く。

一〇月二日、熊本侯の宴席で柴野栗山らと荷葉硯を見る。

三日、菊池内記宅にて淳化法帖を見る。淳化三年（九九三）に編した淳化閣帖の復刻帖であろうか。

一四日、紀州公の呼びだしに応じ、所蔵品を見学す。囑目した書画

器物は、端溪石靈硯以下の列挙したものをさすのであろう。

一五日、四谷の医師千葉玄昌所蔵の琴を見る。

一七日、田村甫賢の持参した明の画家李士達の風雨山水画を鑑賞。

二三日、中村弥太夫所蔵の弘法大師心経、紺絹繡字一幅などを見る。

二六日、白河藩邸に赴き、井伊掃部頭所蔵の定家卿小倉色紙を見る。

二七日、加賀屋甚兵衛持参の明の書画家文徵明の九陵図を見る。

『過眼録』最終の一六は、日付を欠くが、高野山清浄より送られた什宝をあげ、それらを浅草観音寺院で見たことを告げて閉じている。

以上、主に『過眼録』を『集古十種』の視点から活用し、文晁の囑目した書画器物を列記した。しかし視点を変えれば、別の活用方法もあり、したがって文晁愛好家は、『過眼録』などに直接接する必要がある。

五、寛政一〇年から一二年の文晁と白雲

文晁は、寛政一〇年（一七九八）の秋頃まで江戸にいた。同年の春夏頃に江戸に赴いた中井蕉園が帰坂となり、送別の酒宴が、上野不忍池の茶屋で催された。森銑三氏の指摘によれば、文晁も酒宴に加わったようである。『蓮池蜻蛉図』を贈ったとされる。蕉園の父は、大坂の儒者中井竹山である。定信は、天明八年前述のように御所造営のため京都に赴き、その帰路五月二十九日大坂に向かった。このとき、竹山を呼びよせて政事の得失を話しあった。こうした関係から、文晁、蕉園両人は近づきやすかったと思われる。

寛政一〇年九月二八日、文晁は戸山山荘を訪れた。戸山荘は、名古屋藩徳川家の江戸下屋敷である。資性厳正にして文武に通じ、画を狩野探幽に学んだ徳川光友は、四代將軍家綱から戸山の広大な土地を賜わり、これに自ら抱えていた土地を加えて大庭園とした。戸山荘は、尾張中興の祖といわれる徳川宗睦により天明期より庭園の形を整え、時をかけて充実していった。十一代將軍家斉をして、天下の庭園は戸

山山荘にあり、といわせる名園であった。現在は、東京都新宿区戸山町一帯であるが、名園の面影をしのぶことはできない。

「綿五十数里」という戸山荘は、南に表御門を配し、入門すると大書院余慶堂があった。山荘の中央に池泉があり、地泉の程に琥珀橋が架設され、東側を「御泉水」、西側を「上の御泉水」といい池泉回遊式庭園であった。東の地泉にある「龍門の滝」により水量を調整することができた。山荘内の建造物は、土地の高低や広狭を巧みに利用して造られ、ツツジ・桜、各種の樹木が繁茂した。

柴野栗山の『栗山文集』に、「戸山荘図跋」が載る。九月二十八日に戸山荘に赴いた文晁は、余慶堂で宗睦と会い、荘園内を廻った。回遊しながら亭子、社寺の堂舎や門、川や滝にかかる橋、また谷川や丘の向背など一つ一つ向かいあつて描写し、俯瞰したり仰視したりして目にしたものすべてを写生した。この九月二十八日の図藁をもとに、翌十一年（一七九九）五月、全二七図からなる《戸山山荘図》二巻を完成させた。しかしこれは現存せず、淡彩墨画の図藁のみ残されている。

柴野栗山は、寛政一一年の冬、思いこがれていた戸山荘を訪れた。入門するや方位を失うほどの広さに驚いた栗山は、文晁の山荘図を思ひだして借り受けた。山荘図について、「其樹其石 皆類旧相識者 亭樹之名題 巷岐之左右 皆可不問而弁也 乃知良工苦心 樹点石皴毫無妄筆焉」という。点葉法、画樹法、皴法に乱れ誤った表現はすこしもないばかりか、優れた画家の目に見えない苦心を知り、山荘図を「画史実録」と評したのである。

寛政一〇年の初冬、文晁は定信に扈従して白河に向かった。すでに文晁の門下に入り、白河城下の東林寺に転住していた画僧白雲と再会したと思われる。

白雲はこの年より一年前の寛政九年、定信の命を受け武州金沢・鎌倉・江島の諸社寺什宝の調査にでかけ、『集古十種』編纂に参画していた。

この調査には、喜多武清と子乗を伴った。喜多武清（可庵）は古画の鑑定に手腕をふるい、模写に力量を発揮した文晁門下の画家であるから、武清を同伴させたのは文晁の案によつたと思われる。白雲はこの採訪にて、訪古探勝図といえる『天然自賞』を記した。

『天然自賞』は、六月二二日の「品川口南眺望図」からはじまり、七月一日の「富士見茶亭眺望図」をもって終わる。鎌倉・稲村ヶ崎・江の島・富士山などの風景図が圧倒的に多く、欄外に模写調査記録が加わる。風景図は生硬な点もあるが、西洋の遠近法を用いて描かれ、『公余探勝図』の影響を感じとれる。

白雲は鎌倉の諸社寺を巡るなか、建長寺で山門額「建長興禪寺」、西門額「天下禪林」、東門額「海東法窟」、総門額「巨福山」などを写しとつた。これらは、『集古十種』の扁額に載る。このほか鶴岡八幡宮の燈籠や扁額、建長寺碑、江の島弁才天の扁額なども写し、金沢では真言律宗称名寺の十二神将画像を模写した。前述のように文晁は、寛政九年七月四日に白河藩邸で一二幅の神将模写図を見た。なお原図は、室町初期の作とされる絹本着色画である。

さて、寛政一〇年冬に白河に赴いた文晁は、同二年の『画学大全』の柴野栗山序文に「紙期・年・而・帰」とあるから満一年白河に滞在したことになる。しかし森銑三氏が気づかれたように、「屋代弘賢自筆日記」に寛政一一年二月二十八日「文晁昨日帰」とあるから、白河滞在中の文晁は一時期江戸に戻つたのであろう。

白河での文晁は、白雲や大野文泉らと協力し、『集古十種』や『古画類聚』の編纂に邁進したと思われる。『集古十種』の事業は大詰めをむかえていたが、西国の什宝調査に不十分な点があり、そこで白雲による西国歴訪調査となつたと考えられる。

寛政一一年（一七九九）二月三日、白雲は、定信に随従し江戸に向かった。翌三月、白雲は定信の命のもと、大野文泉とともに西国諸社寺歴訪に旅立った。白河出生の大野文泉は、寛政九年に白河藩の御絵師と

なり、文化八年（一八一二）幕府が対馬で朝鮮通信使の礼をうけるさい、林述斎の絵師として随従し、これを期に巨野泉祐と改名している。

白雲と文泉は三月頃江戸を立ち、東海道を下り、神奈川・鶴見・大磯・箱根などの真景図を描き、大坂を経、四月一六日摂州六甲山に至った。四月一八日、大坂の兼葭堂宅へ行き、その後高野山より紀州へ行き、六月九日兼葭堂宅へ戻って畿内を採訪し、七月一九日再び兼葭堂宅へ戻った。八月に山陽道を進み、布引・摩耶・塩屋を経、藩州より海路にて讃岐に渡った。高松・屋島を経、再び瀬戸内海を渡って下津井・岡山へ、それより大山方面に進み米子へ着き、広島帝釈峽に至った。その間白雲は、讃岐・備中・備後・伯耆など各地の真景図を描いた。再び兼葭堂宅に帰ったのは、一〇月二〇日であった。白雲の旅は、『西国名所紀行図』『東海遊覧』『西西遊行誌』からわかる。しかし、これらはのちに画冊とされたため、日付順序が錯雑しており注意を要しよう。（以下次号へ続く）（平成二九年四月一四日受理）

〔註〕

- (1) 森銚三「海量法師」『森銚三著作集第二巻』（中央公論社 一九八八年）一五六ページ
- (2) 磯崎康彦「江戸時代の蘭画と蘭書・上巻」（ゆまに書房、二〇〇四年）五五七ページ
- (3) 板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」（吉川弘文館、昭和四十四年）二五〇ページ
- (4) 長岡由美子「資料紹介『大和巡画日記』（前）・（後）」『美術史学』第一二、一三号（一九九〇年三月、一九九一年六月）
- (5) 森銚三「谷文晁伝の研究」『森銚三著作集第三巻』（中央公論社 一九八八年）一九一ページ
- (6) 鶴岡明美「東京国立博物館蔵相州名勝図帖について」『MUSEUM』六一四（二〇〇八年）
- (7) (5) の前掲書 一九七ページ

Tani Buncho und die illustrierte Werke des japanischen Kulturguts in 85 Büchern

ISOZAKI Yasuhiko

Der Schogunatsführer, Matsudaira Sadanobu hatte die gründliche Untersuchung der Wertgegenstände im ganzen Japan vor. Seine Gefolgsleute, Tani Buncho und andere Kunstmaler, besuchten viele Schreine und Tempeln in jedem Ort, um viele Schätze unterzusuchen und zu verzeichnen. Sadanobu hat 1800 sein Vorhaben ausgeführt.

Das ist die illustrierte Werke des japanischen Kulturguts in 85 Büchern. Die Werke, die wir » Shuko Jutsushu « nennen, bestanden aus den zehn Klassen ; sie sind die Monumente, die Glocke, die Waffen, die Kupferwaren, die Musikinstrumente, die Schreibwaren, die Siegel, die Votivbilder, die Kalligraphie und die Malereien.